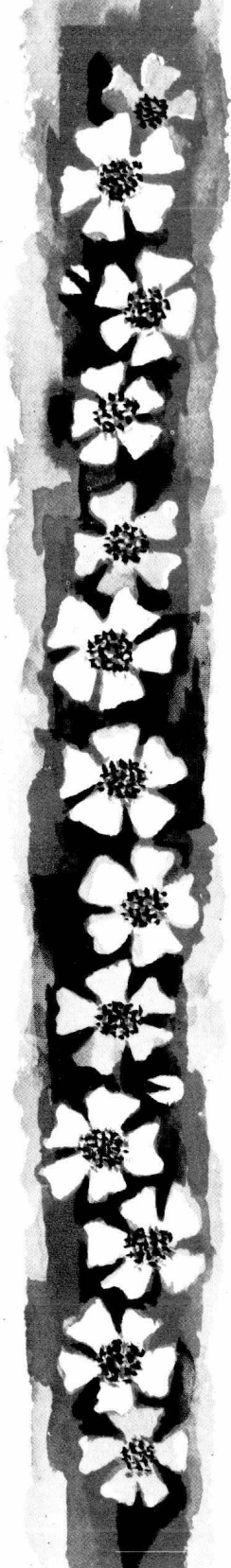
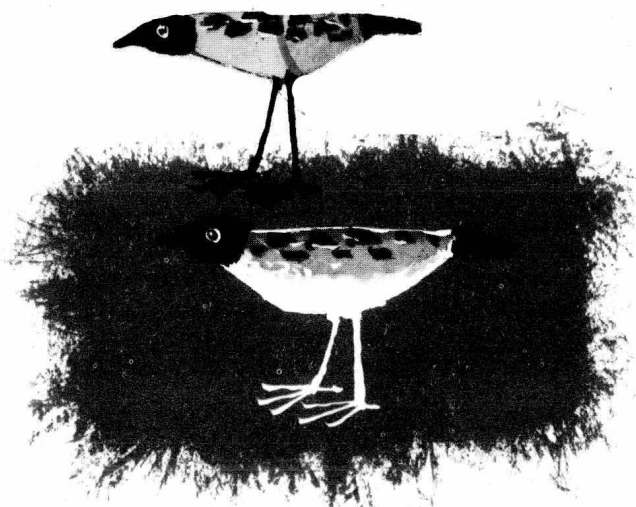




ポプラ社

母のない子と 子のない母と

壺井 栄名作集 5



消印
B09151
埼玉県立図書館

壺 井 栄

母のない子と子のない母と

ポプラ社 昭和42 (1967)

274p 23cm (壺井栄名作集 5)

【分類】 918

壺井栄名作集・5

定価 480円

(著者との話し合いにより検印廃止)

母のない子と

子のない母と

著 者 壺井 栄

発 行 昭和42年12月10日 ©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 石毛製本株式会社

はし が き

小学校から高校までの人たちに読んでもらいたいという目的で、この十巻の作品集がうまれました。わたしの作家生活三十年のあいだに、書きつづけてきたもののなかから、そういう、若いかたたちに理解してもらえるものをえりだしたわけです。まだ幼い人たちには童話を、そして少年少女のかたたちには童話のほかの随筆や小説をも読んでいただきたいというのが、出版社がわの意図のようです。

企画はすべて編集部におまかせいたしました。が、結果としては、これまでの少年少女むきの童話だけの集録から幅をひろげたこのめずらしい企画に、作者のわたしも賛成し、この種の出版として、生涯の記念と思つてよろこんでいます。

壺井 栄



目次

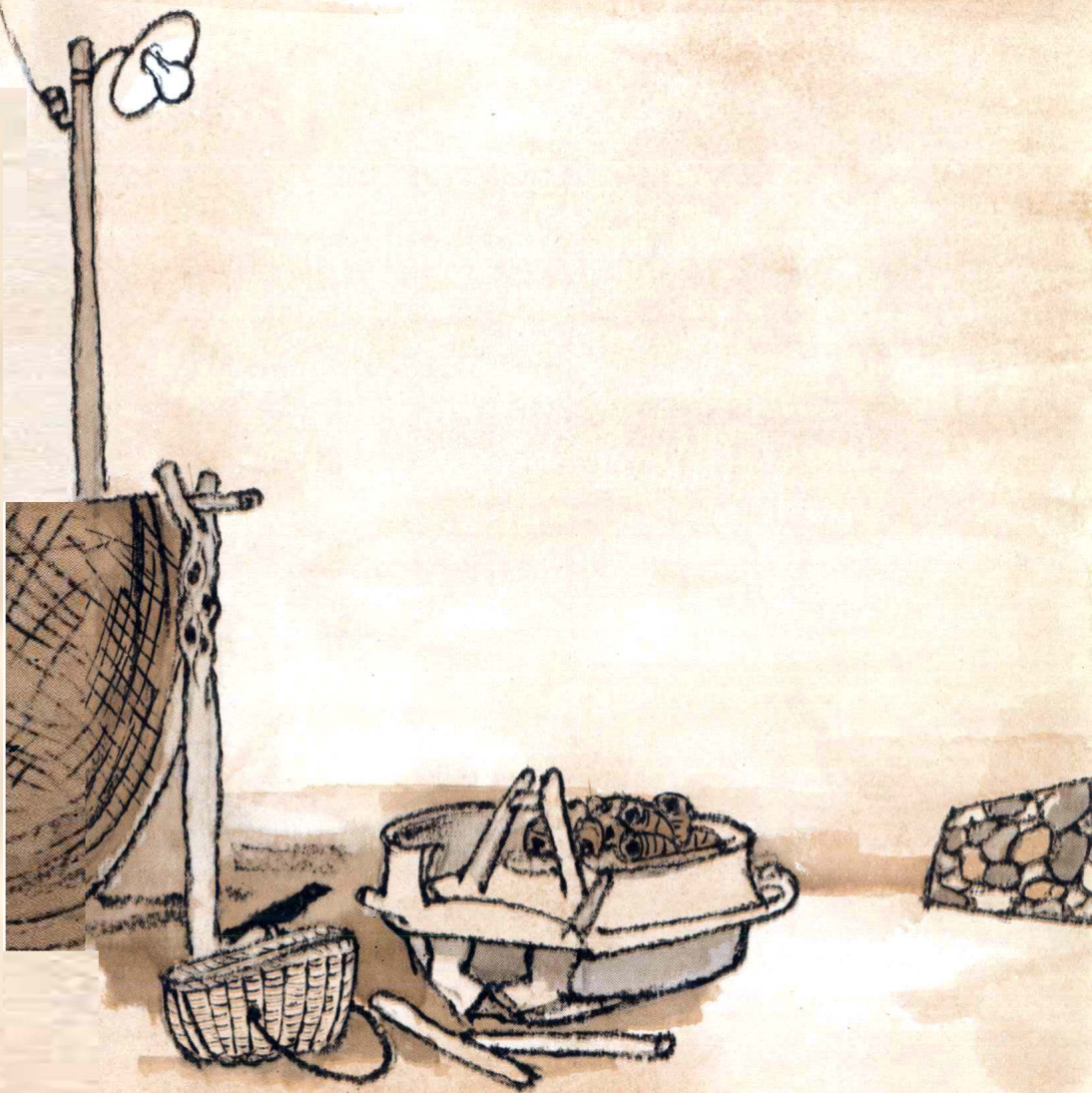
母のない子と子のない母と

- 一、オリーブに吹く風……………6
- 二、風の子……………13
- 三、せりせり こんぼ……………37
- 四、光とかげ……………69



あ と が き	解 ^{かい} 説 ^{せつ} 滑 ^{なめ} 川 ^{かわ} 道 ^{みち} 夫 ^お	三、 十七—八が二 ^そ ど ^う 候 ^{ろう} かよ	二、 母のない子と子のない母と	二、 麦 ^{むぎ} かり ^{ちうえん} 幼稚園	九、 煙 ^{けり} のゆくえ	八、 誕 ^{たん} 生 ^{じふ} 日 ^び	七、 みかんと、やかんと	六、 かめのきた日	五、 青い空
272	267	233	211	186	166	157	134	116	95

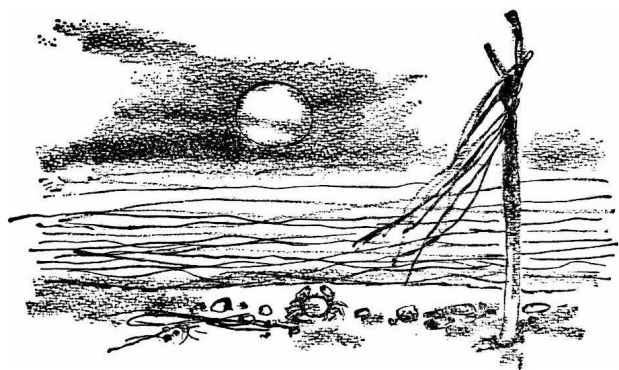




装てい	よし	ぎき	まさ	み
さし絵	吉	崎	正	巳
	わた	なべ	さぶ	ろう
	渡	辺	三	郎

壺井 栄名作集——(5)——

母のない子と 子のない母と



一、 オリーブに吹く風



小豆島しょうじまを知っていますか。もしも、よくわからないようでしたら、いちど、日本の地図ちずをひろげて見てください。瀬戸内海せとないかいの東のほうに小犬のような形をした、小さな島がみつかるでしょう。その小犬はいつも、うつむいてごはんを食べているようなかっこうをしています。その背なかに「小豆島しょうじま」と書かれてあるはずです。

まるで、あずきつぶのように小さそうな名まえではありますが、かぞえきれないほどたくさんある瀬戸内海せとないかいの島々のなかで、小豆島しょうじまは淡路島あわじしまにつづく、二ばんめに大きな島なのです。周囲百五十キロといわれていますから、それでだいたいの広さがわかるとは思います。もっとわかりよくいえば、この島のなかに三つの町と十三の村があります。ごくちかごろのこと（昭和二十六年の春）、いくつもの村がいつしよになって、ひとつの町になりましたが、これからはじまる物語ものがたりはそのまえのことになります。

小豆島は、神懸山かんかけやま（寒霞溪かんかけいともいう）のもみじで人に知られています。もっとめずらしいことは、日本であつた一か所、オリーブがみえることでも名だかい島なのです。

オリーブの木は、外国がいこくでも地中海ちゆうかいにのぞんだ、あたたかい国にしか育たないのだそうですから、小豆島しょうじま

島もそのようにあたたかく、たいそうけしきのよい島です。

けれど、冬のあいだは、島じゅう潮風に吹きさらされて、オリーブのやわらかな枝もゆすぶられつつけています。その風のなかに、くるしいことや、たのしいことや、かなしいことや、うれしいことがぐりかえされて、また春がくるようです。あんなにひどい海風が、じつは、小犬の島の足にあたる岬の山でやわらげられて、オリーブの育つにちょうどよい風になって吹きつけているときいたら、島の子どもたちだって、きつとおどろくでしょう。

これは、オリーブ園の近くの村のお話です。戦争がおわって一年ばかりたったころのことで、どっちをむいても、おとうさんのいない家や、むすこがまだ帰ってこない家がたくさんありました。戦争ちゅう、大阪や神戸あたりから疎開してきて、そのまま帰れぬ人なども、だいぶありました。

これからでてくる、おとらおばさんなどもそのくちでしたが、なんといつても、おとらおばさんは生まれが小豆島でしたから、故郷へ帰ったようなつもりで、すっかり村の人になっていました。若いとき、大阪へお嫁にいつて、十八年ぶりに疎開で帰ったときには、もう親もきょうだいもなくなっていて、いどこにあたる西屋という家の土蔵の階下だけをかりて、そこでひとりくらしていました。

こういう人のなかには、ときどき、とほうもなく子どもずきのおばさんがいるものですが、おとらおばさんもそういうおばさんでした。ひとりぼっちだから、ついさびしさから子どもをよせつけるのかもしれないませんが、でも、まだ村には、ほかにひとりでくらしている人がいますけれど、その人なんぞ、道で出あつても、子どもなんか人間でないみたいに、目もくれずに歩いていきます。

おとらおばさんときたら、子どものすがたさえ見ると、道のまんなかでも大声で名をよぶのですから、しんから子どもをすきなのだと思わずにいられません。四十ぐらいなのに、子どものように、くりくりとした丸顔で、背のちんちくりんのおばさんは、まあいい目をよけい大きく見ひらいて、いろんなむかし話をしてくれたり、ほころびをぬってくれたり、バリカンで頭をかってくれたりするのです。ときには女の子のしらみがりをすることもあります。

そんなおばさんのことを、ものずきだとか、おっちょこ（おっちょこちよい）だとか、なかにはお人よしだなどと、ちよっぴりけいべつするようにいう人もありました。たえものずきでも、おっちょこでも、子どもたちにとっては、いっこうさしかえのないことでありました。おっちょこかものずきというのは、きつと、子どもたちのすきなことかもしれません。

おかあさんのきびしいやさしさともちがう、おばあさんのねこっかわいがりともちがう、身内のおばさんたちの、えんりよなしの、むきつけいいともちがう、それでいて、おとらおばさんと話していると、びしびしいわれてもなんだかうれしくなる、そんなおばさんなのです。

ちよつとへんなのは、おとらおばさんのとこへよってくるのが、おもに、男の子だということです。しかし、へんだなんていうのは、そのほうがへんなことで、もしもおばさんに、そのわけをきいたなら、おばさんは、きつというでしょう。

「男の子は遊びすぎだからね。十歳^{とお}になっても、のほ^いずに遊べるんだもの。女の子ときたら、むかしから、なんじゃらかんじゃらと手つたわされて、遊ぶまもなしさ。かわいそうに。」

それはきつと、おばさんの経験けいけんしたことなのでしょう。しかし、そうはいっても、おばさんの心のなかには、ちっとばかりわけがありました。おばさん自身じしんは、このごろめったに口にだしませんでしたが、なくなつたむすこの小さいときのおもかげを、子どもたちのなかにさがしていたことです。おばさんは、自分がむすこになにかわつて、子どもたちと遊んでいたのかもしれない。

おばさんのひとりむすこは少年航空兵しょうねんこうくうへいでありました。終戦しゅうせんのまえの年、土佐とさ（高知こうち県けん）の後免ごめんという町の兵営へいえいにいたそのむすこが、きとく、だという電報でんぽうをうけとつて、おばさんはふだん着ぎのまま、かけつけました。

しかし、いくら心はかけつけても、そのときいた大阪おおさかから土佐とさまでいくには三日もかかりました。汽車きに乗り、船に乗りかえ、また汽車をなんども乗りかえて、やっと後免ごめんへついたのは三日めの夜でした。防空演習ぼうくうえんしゅうで、まっくらな後免ごめんの町を、おとらおばさんは、きちがいのように大声で泣きながら、二どほど面会めんかいにきて、知っていた駅前えきまえの道を、足さぐりで歩いて、いつもいく宿屋やどやにたどりつきました。

そこには、ほかに四・五人のおかあさんやねえさんがきていて、その人たちはみな、むすこや弟おとうとがきとくだという電報でんぽうでやってきた人ばかりでした。おばさんのむすこたちは、はじめて乗った練習機れんしゅうきが故障こしょうのためにつらくし、きとくの電報をうったときにはもう、みんな死んでいたのでした。

そのときのことを、おとらおばさんはこんなふうにいっただけあります。

「——シシオー シシオー と、おとらが一生いっしやういちどの声でよんでみたけれど、シシオは鼻血はなちもださな

んだ。タイガーがライオンをよばわたったのさ。」

ふざけたようないいかたをしましたが、おとらお婆さんの目のなかはきらきら光りだし、涙がもりあがっていました。お婆さんのむすこの名は、なんとめずらしい獅子雄という名まえでした。これとて、わけがあるのです。

おとらお婆さんが生まれたときにさかのぼらねばなりません。四十年もまえのことです。村の中百姓の家に、月たらずの、あわれそうな女の子が生まれました。四人めにはじめて女の子なので、一家は大よろこびでしたが、いかにもひよわな赤んぼうを見ると、この子がぶじに育つかと、そのおかあさんは心をいためました。するとおとうさんが、おかあさんをなぐさめていいました。

「おとらとか、おくまとかいう名にすると、たっしやに育つというでないか。この子もおとらか、おくまとつけようではないか。」

そこで、おとらお婆さんの名まえがきまりました。小豆島に、はじめて植えたオリーブの木が育ちだしたころのことです。そのおとらさんもぶじに育ち、年ごろになり、そして大阪のくすり屋へお嫁にいき、そして子どもが生まれました。母親似とでもいうわけなのか、せっかくの男の子が、月たらずでもないのに、ふつうよりもずっとずっと小さかったのです。おとらお婆さんは、おとらお婆さんのおかあさんとおなじように案じ、子どものおとうさんに相談しました。

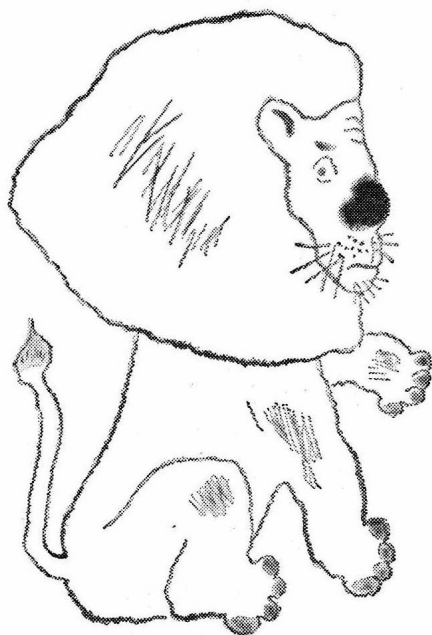
「じょうぶに育つように、虎雄か熊雄とつけましょうよ。女の子のとりやくまはすこしはすかしいけれど、男の子は元氣そうでいいから。」

自分が、ときどき、はずかしい思いをしたことを心にうかべながら、若いおかあさんのおとらさんが

いうと、^{やくざいし}薬剤師のおとうさん
は、ちよつとばかりへそ
をまげて、

「そんな人まねするくらい
なら、いっそのこと獅子^{しし}
雄^おとしよう。」

こんなわけで、おとらと
いい、獅子雄^{ししお}といい、ぶじ
に育ち、しあわせにくらす
ようにとねがう親心^{おやごころ}からつ
けた名まえでしたが、戦争^{せんそう}
は人間のやさしい思いやり
になど、すこしもとんじや
くしないで、たくさん(3)の若
いのちをうばい、たくさ
んのおかあさんや子どもた
ちを泣かせました。おとら



29164

おばさんなど、むすこばかりか、大阪おおさかの空襲くうしゅうでは、つれあいのおじさんまでうしなってしまったのです。まだそれほど年でもないのに、おばさんのしらががきゆうにふえたのはそれからです。それらのおばさんは、ずっと小豆島しょうとしまに腰こしをすえています。

生まれ故郷こきょうですもの、もうおばさんはどこへもいく気はないでしょう。もしかしたら、なくなったおじさんやむすこのことを思いたすのがかなくて、おばさんは大阪おおさかへいかないのかもしれない。ま四し角かくな、かべばかりおおい土蔵どぞうのなかで、おばさんはミシンの内職ないしよくをしたり、大阪おおさかからとりよせたくすりを売ったりしながら生きていましたが、子どものこないときなど、おばさんは、まるで、風のなかからなにかの音をききだそうとでもするように、じいっとして考えこんでいることもありました。でも、そんな顔かおを知っているのは、土蔵どぞうのなかのかべばかりです。

二、風 の 子



二八月は風の季節です。ことに二月の風は、ぼんやりしていると吹きとばされるほど、もうれつでした。ピューと、笛をふくような音をたてて、いちにち北風が、電線をゆすぶりつつづけています。

風のしずかな日でも、じっとしていれば、首のまわりやそで口や、ズボンのすそをめぐけて、刃物のような痛さで、しのびこんできます。それをはらいのけるには、かけたすことがいっとうです。ぼんやりなどしてられません。

子どもは 風の子

じじ ばば 火の子

どなっているのか、うたっているのか、とにかくそれで、冬の風とたたかっているのです。海から吹きあげ、山から吹きおろす風と風は、もみあって、うずをまいて、なにもかも、もみくしゃにするのです。

そのつむじ風を、まいまい風と、子どもたちはいいました。木の葉も紙くずも、浜の砂までも吹きあ

げ、吹きとばすまいまい風に、息をつめ、目を細めながら、子どもたちは前こごみになって走りました。

子どもは 風の子

じじ ばば 火の子

それは元気な子どもたちの合いことばです。寒がりの弱虫をわらうときにも、これをうたいます。人にうたわれるとき、それははずかしめの歌であり、自分でうたえば、自分をきたえる冬の歌です。

「ほい、ほい、火の子かよつ。」

かぎ屋のひとりむすこである史郎は、学校から帰るなり、おばあさんのこたつべやにもぐりこんで、たぬきねいりをしているところを見つかり、ゆすぶられました。

昼間、こたつにはいると、かぜをひくからといって、雨ふりでもないかぎり、ゆるされないことになつていたのを、だれもないのをいいことにして、ぬくぬくと、もぐりこんだばかりだったのです。火の子かといわれてぬけたものの、あてつけにねこのホーをも、いっしょに引っぱりだし、ドスンとたたみの上にほうりなげておいて、へやを出ながら、

「ねこのほうが、ぼくより、かわいいのかよつ。」

と、にくたれ口をいって外へとびだしました。まだぬくもらなかったとはいえ、こたつべやから、まいまい風のなかに出てみると、寒さはいちだんと身にしみました。

「子どもは、風の子！」